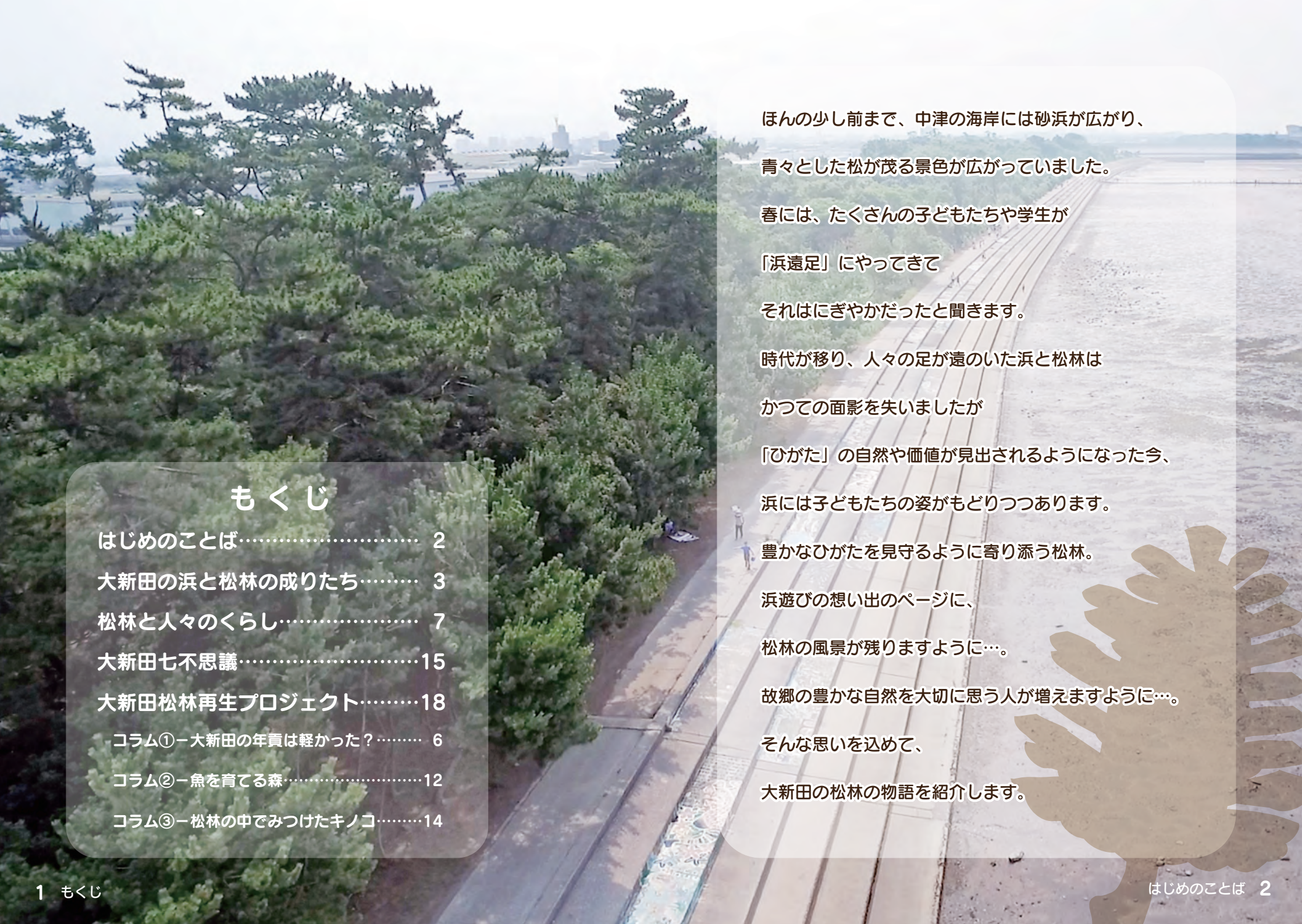
大新田の浜と松林の物語

NPO法人 水辺に遊ぶ会



もくじ

はじめのことば…… 2

大新田の浜と松林の成りたち…… 3

松林と人々のくらし…… 7

大新田七不思議……15

大新田松林再生プロジェクト……18

コラム①－大新田の年貢は軽かった？…… 6

コラム②－魚を育てる森……12

コラム③－松林の中でみつけたキノコ……14

ほんの少し前まで、中津の海岸には砂浜が広がり、

青々とした松が茂る景色が広がっていました。

春には、たくさんの子どもたちや学生が

「浜遠足」にやってきて

それはにぎやかだったと聞きます。

時代が移り、人々の足が遠のいた浜と松林は

かつての面影を失いましたが

「ひがた」の自然や価値が見出されるようになった今、

浜には子どもたちの姿がもどりつつあります。

豊かなひがたを見守るように寄り添う松林。

浜遊びの想い出のページに、

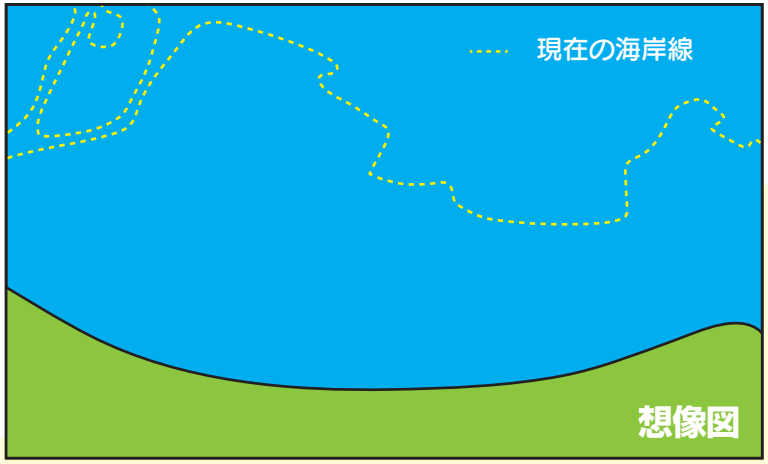
松林の風景が残りますように…。

故郷の豊かな自然を大切に思う人が増えますように…。

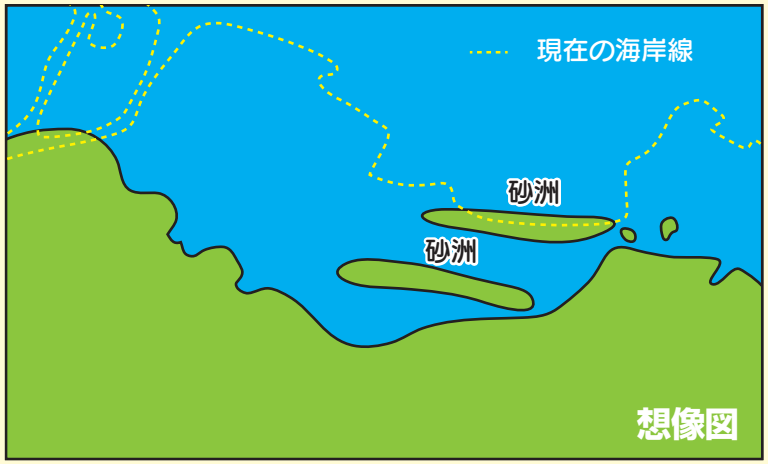
そんな思いを込めて、

大新田の松林の物語を紹介します。

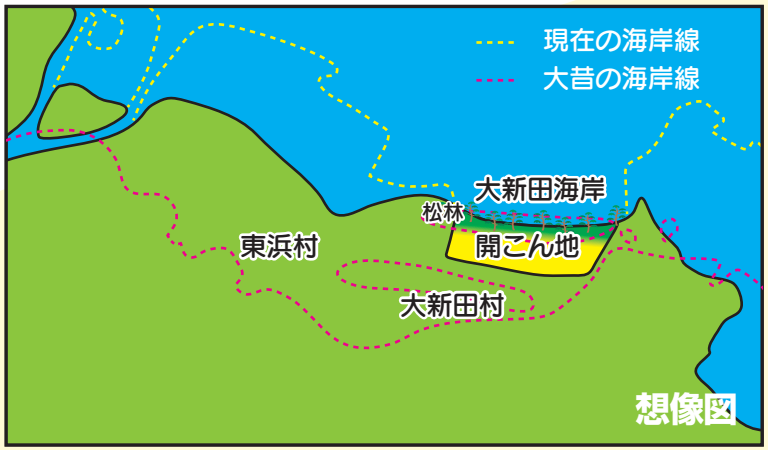
大新田の浜と松林の成りたち①



約 15,000 年前（先土器時代）大新田は海の底にありました。



約10,000 年前～ 2,300 年前（縄文時代）海の中に二列に並んだ砂洲が見え隠れするようになりました。
約2,300年前～1,700 年前（弥生時代）海の中の砂洲に砂がたまって高くなり、大潮の満潮の時にも見えるようになりました。



約300年前（江戸時代）砂洲の間の湿地が開こんされて田んぼになりました。また、二列のうちの陸側の洲の上に集落ができて、東浜村と大新田村になりました。海側の洲は土手として使われ、ここに防風林として松が植えられたと思われます。

伊能忠敬が測量した地図で見る大新田海岸（1810 年 2 月頃）

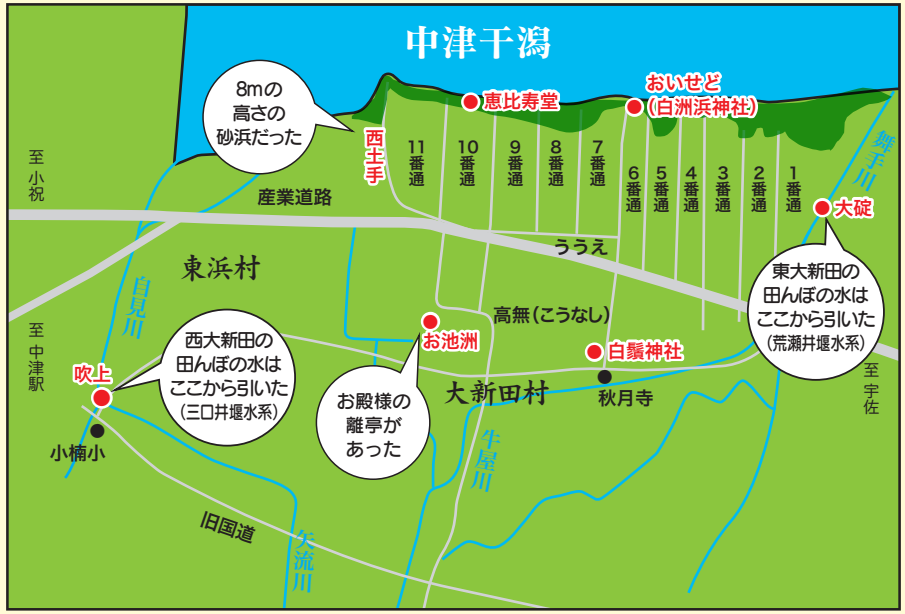
●参考文献
中野幸喜　「大新田村の歴史と白鬚神社の由来」　1979年
文化庁　「文化遺産オンライン・伊能忠敬測量図」
http://bunka.nii.ac.jp/heritages/detail/135394（2018.3.21）

大新田の浜と松林の成りたち②

大新田はじまり年表

15000〜1700年前頃
　大新田沖に2つの砂洲ができ、弥生時代頃に陸地化が始まる。
1698年　小笠原長円（ながのぶ）が東浜村の松原にあった「お池洲」に豪奢（ごうしゃ）な離亭を築く。
1700年代前半
　この頃に大新田の干拓が行われたと推定される。
1768年　東浜村から独立し藩内で認められる一村「大新田村」となった。
1810年　伊能忠敬が測量を行う。

参考文献：中野幸喜『大新田村の歴史と白鬚神社の由来』1979年など



大新田の地図

海岸の変遷

1947年（昭和22年）

1974年（昭和49年）頃

2013年（平成25年）

出典：国土地理院
地図・空中写真閲覧サービス

コラム①　「大新田は年貢が軽かった？」

大新田村ができたばかりの頃、当時の中津藩の年貢（税金）は非常に高く七公三民（七割を年貢として納め、残りの三割を農民が使う）でした。けれども、大新田地区の年貢は、なんと五公五民でした。これは、大新田が開墾（かいこん）したばかりで、お米を作るのが大変だったために、年貢が軽くされたものだと思われます。

松林と人々のくらし①

まつばかき（まつかき）

ガスや電気が一般家庭に普及する前の時代、家庭の竈（かまど）や風呂の燃料は薪（まき）が主でした。松葉は油分が強く火がつきやすいので、薪の焚（た）き付けとして利用されていました。どの家でも松葉をかき集めて持ち帰り、軒先に積んで保管していましたが、これらは学校帰りの子どもたちの仕事だったようです。

地域の人におはなし聞きました

●風が強く吹いたら松葉がたくさん落ちるので、ガンゼキでかき寄せて拾い、ワラで作ったホゴ（袋）に入れて運び、家のまわりをぐるりと囲むように積んでおいて竈や風呂の焚き付けにしました。学校から帰ると、松葉かきに行くのが子どもの日課でした。

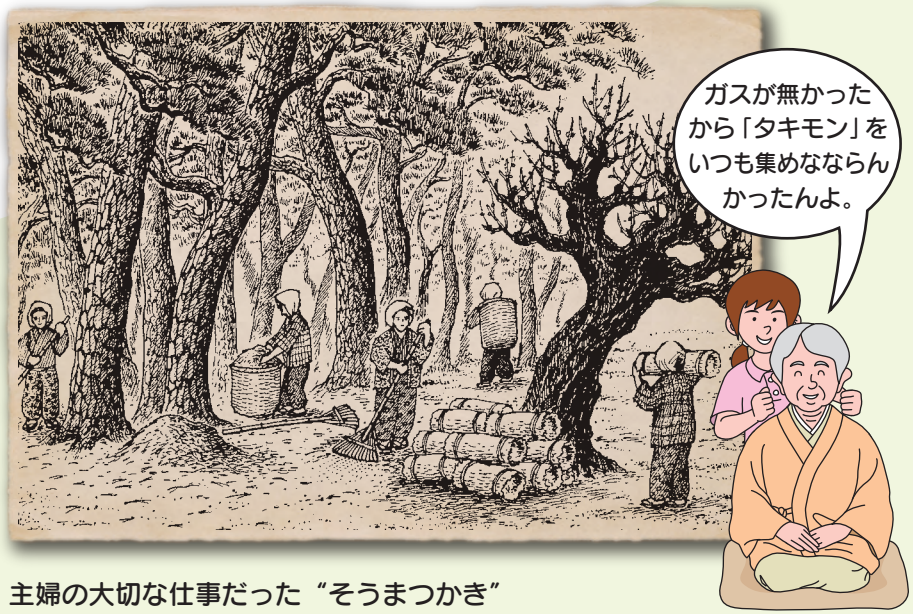
ガンゼキ

地域の人におはなし聞きました

●松葉や松の枯れ枝は拾って持ち帰り、焚き付けにしました。毎日のようにガンゼキで松葉をかきに行きました。娘たちも自転車で松葉とりにいかされました。台風が来ると、木端（こっぱ）や木ぎれが流れつきますが、それも持ち帰って焚き物にしました。ですから、松林の下や浜はいつもきれいでした。自然と林床の管理になっていたのでしょう。

地域の人におはなし聞きました

●戦後、風呂の燃料が手軽に手に入るようになったので、松葉拾いはやめました。この頃から、みんな松林や浜に行くことがなくなりました。



主婦の大切な仕事だった“そうまつかき”

出典：外園健一『市報なかつ』 私の思い出

大新田で行われた「浜遠足」での松葉かき風景（2017.11）

松林と人々のくらし②

浜 遠 足

中津市近郊の春の風物詩に浜遠足があります。新入生を迎えた学校では、全校生徒で浜に歓迎遠足に行きました。近くの学校は徒歩で、耶馬溪などの学校はバスを利用して大新田や三百間の浜に行き、楽しみました。浜での過ごし方は学校ごとに違い、運動会や宝さがしなどが行われ、中津市民の想い出の１ページとなっています。

地域の人に おはなし聞きました

●4 月に上級生が新入生の手を引いて出かけました。耶馬溪の学校はバスできていました。小学校の浜遠足は家族ぐるみだったので、お母さんがお弁当をもってきて、ご近所みんなで集まって食べました。卵焼きが楽しみでした。

地域の人に おはなし聞きました

●小学校の６年間春の遠足に行きました。松林の中に番号を書いたカードを先生が隠し、見つけると景品がもらえました。松林の中はゴミもなくて明るかったです。浜には大きなつがいのカブトガニがたくさんいて、つかまえたりしました。

地域の人に おはなし聞きました

●お父さんは 1 年生から 6 年生の間、毎年浜遠足に行ったそうです。宝さがしが楽しみだったそうです。

地域の人に おはなし聞きました

●春の遠足は親子遠足でした。貝掘りや宝さがしをしましたが、一番想い出に残っているのは、浜で親子一緒に食べたお弁当です。懐かしいです。

浜遠足にて。広くなだらかな浜辺で記念撮影。

砂浜ですもうをとる

浜辺と人々のくらし①

お汐汲み

元旦の早朝、家長がなるべく遠くに清水をくみに出かけ、途中で誰かに会っても口をきいてはいけないとされていました。そうしてくんできた「若水」は邪気を除くと言われ、年神様にお供えしたり、お茶をたてて飲んだりします。中津などの海辺の町では、この若水を海にくみに行くことが多かったようです。海水は飲むことはできませんが、神様にお供えしたようです。

地域の人におはなし聞きました

●元旦の早朝、竹で作った小さな筒と笹の小枝を持って家長が「汐汲み」に行きます。波打ち際で筒に汐をくみ、白髭神社で汐水に笹を浸してお祓いをし拝礼。残りを家に持ち帰り、神棚でお祓いをした後、家族一同で拝礼します。父の死後、長女の自分が汐汲みに行きましたが、波打ち際で足がぬれ、冷たくて泣きたかったのを思い出します。

地域の人におはなし聞きました

●除夜の鐘の前に親に連れられて、真っ暗な道を元旦用の汐水をくみに行きました。海が真っ黒で恐ろしかったです。くんだ水は「おいせど」に奉り、次に白髭神社に参り、御神酒をいただいて家に帰りました。

地域の人におはなし聞きました

●耶馬溪や三光にすむ人が、雨乞い神事のために汐水をくみに来たことがありました。

おんばら（御祓い汐）

８月の大潮の時期に、海水につかる浜の行事。あせも予防になったり、風邪を引いても治りが早いと言われました。風呂などが一般家庭に普及していなかった時代の、健康に過ごすための習慣のなごりかもしれません。

地域の人におはなし聞きました

●宇佐神宮の夏祭りの頃になると、村の人と連れだって海に行き、汐につかりました。特別なことをするわけじゃなくて、ただ潮水につかるだけ。あせもには効き目がありました。

地域の人におはなし聞きました

●いつやるとか決まってるもんではなくて、夏の夕方に海につかりに行くだけです。子どもたちのあせもにはよく効きました。

コラム②

「魚を育てる森」

「あすこに松林があるじゃろ。あげなところん下にゃ魚がうんとおるんじゃ」沖から大新田の松林を見ての漁師さんの言葉です。自然とともに生きてきた経験からにじみ出る金言です。

浜辺と人々のくらし②

その他の昔話

昔は、人々の生活と浜辺の自然環境は深くつながっていました。ですから、地域の方々の思い出もいっぱいあるのです。ここでは、その一部をご紹介します。

地域の人におはなし聞きました

●戦時中に田尻の海岸に B29が墜落するという事故がありました。松林がクッションになったのか、パイロットにけがはなかったです。村の人が集まって、塩田の塩を炊(た)く大釜(おおがま)を風呂にしてパイロットをあたためてあげました。飛行機のガラスは厚くて丈夫なので、子どもたちはおもしろがって海岸に拾いに行ったものです。

地域の人におはなし聞きました

●松林の下には松露(しょうろ)というキノコが生えていて、ご飯に炊き込んだりして食べました。あまりおいしかった記憶はないですが、お年寄りは喜んでいました。

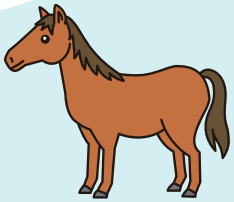
地域の人におはなし聞きました

●松林の中で松露やハッタケなどの「ナバ（きのこ）」をとりました。松林の中には、いろんなナバがたくさんはえていました。

地域の人におはなし聞きました

●学生時代陸上選手だったので、どこまでも続く大新田の砂浜で、走るトレーニングをしていました。おかげで、脚に力がつきました。

地域の人におはなし聞きました



●砂の上を農耕馬でとばしたことがあります。昔は、馬を飼っている農家が多かったです。

地域の人におはなし聞きました

●新田の砂浜では競走馬を走らせたりもしました。干潟がどまる（うまる・はまる）のをわからず、馬が腹までどまってしまい、ひっぱり上げてほしいと頼まれたこともありました。

地域の人におはなし聞きました

●戦争中は松根油をとり軍に納めていました。松根油を飛行機のガラスに入れると、ピストルの弾が当たっても割れにくいと言われていましたが、本当にそのような使い方をしていたのかはわかりません。

コラム③

「松林の中でみつけたキノコ」

ニセショウロ（毒）

マツオウジ（弱毒）

松は菌根菌(きんこんきん)とよばれるキノコ類と共生しています。昔のように、ショウロやハツタケなどがとれるようになると松も元気に育つといわれています。

大新田七不思議

壱 おいせど（お伊勢堂）白洲浜神社

昔、白髭様という神様が流れ着いたことで、おいせどができたという伝説があります。実際は、江戸期に潮止め工事の完成を祈って祀られたようです。伊勢神宮に行けない人々が、ここで参拝したことから「おいせど」と呼ばれています。

弐 恵比寿様は漁業の守り神

浜の西側に小さな「ほこら」があります。中には恵比寿様と浜に流れ着いたとされている石が安置されています。いつごろからあるのかは分かりませんが、建干網など漁業に縁起の良い神様として祀られたのかもしれません。

参 ハート型の…

戦中から戦後に松ヤニをとるために作られたキズが♥の形になって、今も古い松の幹に残っています。ぜひ探してみて下さい。松ヤニは、物が無かった時代に機械油の代わりにも使っていたと聞きました。

四 歌舞音曲の「お池洲」

元禄 11 年（1698 年）に中津藩主小笠原長円が大新田のお池洲という所に離亭を築きました。面積は480坪で、部屋を書画でかざり、江戸から大夫を呼び寄せ日夜楽しく過ごしていたと言います。場所は現在の大分県立工科短期大学校付近になります。今となっては夢の跡です。

小笠原家家紋

大新田松林再生プロジェクト

NPO法人水辺に遊ぶ会では「浜遠足復活」をテーマに、土地の所有者の皆さまのご理解をいただき、大新田松林再生プロジェクトを実施しています。先人が１本１本松を植え、造り出した二次的自然である松林は、常に人の手が加えられないと、その機能が発揮されません。荒廃している林床の手入れを行うことにより、衰えてしまった松の樹勢を蘇らせ、元気な松林を再生することを目的に、平成26年よりボランティアの方々とともに活動を行っています。皆さまのご理解とご協力をよろしくお願いいたします。

広葉樹を伐採する

松は元来、潮風の当たる海岸など、厳しい環境に強い樹木ですが、広葉樹との競争には弱い樹木です。松の育成を妨げる広葉樹を伐採することで、松が健全に育つ環境を整えます。

下草と堆積物の除去

松は日当たりの良いやせた土地を好みます。林床の下草や低木、地面に堆積している枯れ葉や腐植土を除去し、本来の砂地が現れる状態にします。

落葉した松葉をかく

松葉をかき集める作業は、雑草の繁茂を抑える効果もあります。繰り返し継続することにより、林床は常に砂地が露出した状態となり、「白砂青松」の風景が戻ります。

周辺環境の整備

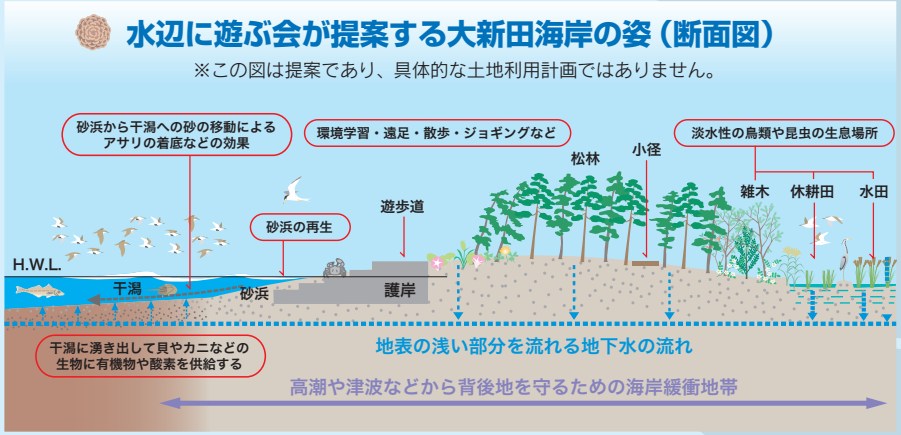
林床をはじめ海岸や干潟のごみ拾いを定期的に行うことで、周辺環境の美化に努めます。ごみのない環境は、景観の向上とともに、不法投棄やごみのポイ捨ての予防につながります。

子どもの体験学習の場

中津市内の子どもたちの多くが、豊かな中津干潟の環境を学ぶために大新田の浜を訪れます。松林のもたらす木陰は、子どもたちに地域の自然を学ぶ場と、休憩の場を提供します。

多様な意見を反映

地域にお住まいの方や市民のみなさん、各種団体、行政など、多くの方々のご意見をうかがい、みなさんとともに大新田松林の未来の姿を描いていきたいと考えています。



昭和30年代の大新田松林での浜遠足風景

大新田の浜と松林の物語

発行日　2018 年 3 月

発行者　**NPO法人 水辺に遊ぶ会**

大分県中津市中央町 2-8-35　TEL/FAX.0979-77-4396

E-mail：info@mizubeniasobukai.org　http://mizubeniasobukai.org/

本書の内容について無断で複製することを禁じます。 ©2018 Nakatsu Waterfront Conservation Association

この冊子は「大分県地域を担うNPO協働モデル創出事業」で作成しました。